

セミナー2

『ヘンリー六世』三部作を読む

コーディネイター： 石橋 敬太郎（岩手県立大学教授）

メンバー： 団野 恵美子（姫路獨協大学教授）

土井 雅之（学習院大学助教）

真部 多真記（常磐大学准教授）

本セミナーの目的は、劇作家の「歴史観」や「歴史意識」を視野に入れながら、女性や庶民の動機や行動、さらには劇中の祝祭空間に焦点を当て、摂理主義的な歴史観にとらわれない新たな読みの可能性を模索しようとするものである。議論に先立ち、E・M・W・ティリヤードの『エリザベス朝の世界像』（1943）と『シェイクスピアの歴史劇』（1944）以来、フィリス・ラッキンの『歴史の舞台』（1990）に至る批評史を概観し、問題の所在を確認した。それぞれの発表者が『ヘンリー六世』三部作の新たな読みを披露した後で、劇中における女性、庶民や祝祭空間の果たす役割がどのようにシェイクスピアの英国史劇あるいは他のジャンルに影響を与えたのかについて検証してみた。

＊

『ヘンリー六世』三部作には、多くの女性が登場し、それぞれが実際以上の役割を担ってイングランド王国を揺るがす。女性の活躍、暗躍が全体を通して際立ち、それらが歴史の転換点で史実よりも大きな意味を占めている。発表では、三部作はもちろん王国史劇全体のテーマともなる、フランスとの敵対関係から育まれていくイングランド人としての意識や、敗戦を経て失った自信を取り戻し、他国の干渉は受けないというイングランドの気概を形成していく過程に、女性の存在がどのような意味を持つかを検証した。

第一部で問題となるのは、敗戦をどう描くかである。実際にはすべての戦いで敗れるが、劇世界ではそれぞれの戦場で一退一進し、イングランド軍が最終的な勝者となる。フランス貴族を軟弱な男たちと描く一方、ジャンヌ・ダルクとオーヴェルニュ伯爵夫人の活躍を目立たせ、正々堂々と勝負せず、卑怯な手を使うフランス人と表象する。

第二部、第三部の主題は、イングランド人が敗戦から内戦へという経験をどのように克服するかである。エリナーとグレイ夫人は、侵略者マーガレットを退けるため男たちとは違った戦いを展開する。一方は真正面から張り合い、もう一方は子孫に希望を託すという女のしたたかさで対抗している。男たちは敵味方の女たちに奮い立たされ自己を再確立し、外国勢力の介入を拒む気骨を示す。

補足では、『ヘンリー六世』三部作からの展開を、女性表象に主眼をおいて、『リチャード三世』、『ジョン王』、『マクベス』などの作品から辿った。これらの作品に登場する女性には、上記五人の女性の特徴が反映されていることが確認でき、原型となった一人一人からまた魅力的な登場人物が作り出されたことを指摘した。

(土井雅之)

＊

歴史劇における王位をめぐる権力闘争は男性の活躍の場であるが、シェイクスピアは物語の転換点、筋の展開の重要な鍵は女性に握らせている。シャルルを叱咤激励するジャンヌや、夫を蔑み策略をめぐらすエリナーやマーガレットの登場で、男女の地位も王と家臣の関係も逆転現象を起こす。喜劇では登場人物が異空間である森へ逃げ込み、アウトサイダーである道化の進言によって、不和は浄化され和解を迎えた。また、C・L・バーバーの「祝祭世界」では、一夜限りのカーニバルの王を立て、身分の上下も男女の別も逆転した一時を楽しみ、その終焉はカーニバルの王が排除され日常に戻るパターンが見られる。発表では歴史劇における祝祭世界を認識することで、『ヘンリー六世』三部作での女性登場人物の役割を考察した。

第一部では、女性という祝祭空間を通過し、スケープゴートとしてジャンヌを退けることで英仏の停戦条約が結ばれ、第二部では、女性の魅力に囚われた男性や妻に牛耳られる男性が身の破滅を招き、男女間の不和が国家の秩序を乱すことが示される。その結果、女性の魔力に捕われず、息子との強い絆を見せる人物がイングランドの英雄として王権を握ることがわかり、第三部の最終幕も、息子に王位継承を約束する平和な情景が異なる意味を持ち始める。『ヘンリー六世』において祝祭空間の外部には父と息子の絆が強い男性社会が存在し、王権争いからの脱出手段として祝祭空間に逃げ込んでも、それは解決への道筋には繋がらない。不満分子を一掃するカーニバルの夜が明け、祝祭空間を出て初めて新たな王が生まれてくる。

発表の後半では、父と息子の絆を強調した作品として『マクベス』に女性を排除した空間が描かれていること、ジョン・クラウンの改作『ヘンリー六世』における女性の描かれ方について比較検証を行った。

(団野恵美子)

＊

歴史記述は国王や貴族の栄光の物語を記録する一方で、『ヘンリー六世』三部作では歴史記述にはあらわれにくい庶民に焦点をあてることで、歴史記述に対して挑戦している。とりわけ第二部では、グロスターと貴族たちが対立する場面やサフォークが殺害される場面で、本来ならば貴族が担うはずの国益に関する問題を庶民が語り、歴史記述にはない庶民の存在感を見ることができる。またジャックケイドの乱においても、現存するマニユスクリプトや歴史記述等に記されているケイドたちの要求書では、庶民の不満として、ヘンリー六世下で財政収入を支えるために頻繁に行われた課税や徴収権の濫用、寵臣政治による政治腐敗、ケント州での州官吏らによる不当な逮捕や収税吏選定の不透明さなどが記されているが、第二部ではケイドの乱にイングランドの歴史のなかでもとりわけ人々の記憶に残る1381年の民衆暴動を織り込むことで、社会の仕組みに対する庶民の敏感な反応を描き出し、要求書に記されていた課税による負担の問題をさらに大きな社会階層批判へと広げ

ている。ケイドがアイデンと対峙する最後の場面まで歴史記述の価値観を揶揄し続けるように、第二部における庶民の役割のひとつは、国王や貴族の物語からなる歴史記述にリアルな視点を投入し、歴史記述が重視する摂理主義や父権制の維持、世襲特権について挑んでいくことだと考えられる。

歴史記述への挑戦は『ヘンリー六世』以後の歴史劇ではさらに複雑に描かれていき、例えば『ヘンリー五世』では国王の軍事的栄光という歴史記述の主題が、ヘンリーを取り巻く人物たちによって巧妙に揺さぶられている。このようにのちの歴史劇の展開を考えたとき、歴史記述にはみられない歴史劇の可能性を探求する出発点として『ヘンリー六世』三部作を位置づけることができる。

(真部多真記)

＊

シェイクスピアが『ヘンリー六世』三部作を創作する際に資料としたと考えられているホールやホリンシェッドの歴史編纂の特色を一言でまとめるなら、摂理主義的な歴史観と並び、イングランド人の国王に対する忠誠、勇気、軍事的な名誉や愛国主義といった男性的な美德が理想化され、記録されていることが挙げられる。それは、軍事的な栄光をイングランドの支配構造の根底におく年代記作者たちの歴史認識の現れでもある。この路線に沿って、劇作家も、年代記に記録されている男性的な美德を軍人貴族トールボット卿やベッドフォード公に具体化する。

しかし、アクションが展開するにつれて、そのような男性的な美德は減んでしまう。むしろ、ジャンヌ、オーヴェルニュ伯爵夫人や王妃マーガレットは、男性にとって特権的な場である戦場や政治の世界に侵入して、不気味なまでに過去の歴史に刻み込まれる。発表においては、本劇が創作された時代、相続権を手に入れた女性たちが自らを語る「声」を獲得しつつあり、父権制を動揺させる新たな勢力として認識され始めていたことや、エリザベス女王の消極的な対外政策を意識して、劇作家がイングランドの軍事的な名誉を拭い去る女性を中心とした歴史編纂を試みたことを検証した。そして、女性による男性的な美德の抹消が王国の混乱を招くことを描出したと論じてみた。

イングランドの父権制が女性によって不安定にされる可能性は、続編『ジョン王』のエリノアにも見られる。そして、女性を中心とした歴史編纂に着目するとき、これまでのシェイクスピアの歴史観に新たな知見が生み出されることについて、提案してみた。

(石橋敬太郎)